

左翼運動からマイノリティへ
——在独アレヴィーのマイノリティ化の一様相——

石川真作*

**From Leftist Movement to Minority:
An Aspect of the Formation of Alevi as a Minority in Germany**

ISHIKAWA Shinsaku *

Alevi are the one of the Islamic religious minorities in Turkey. The certain population of Alevi is contained among Turkish immigrants in Germany, and there is the process of the formation as a Minority group in Germany. On the other hand, some of them had been involved in the leftist movement in Turkey at 60's -70's. Then, as the result of the coup d'etat at 1980, some people came to Germany and participate the organizing of the Alevi's associations in Germany. In this paper, I will examine the process of the transition from leftist movement to "New Social Movement" of minority called "Alevi", through the formation of the associations of Alevi in Germany and an experience of a man who has been engaged in both leftist movement in Turkey and activities of an association in Germany.

As Touraine said, Socialist movement has lost the roll of promotion for social change at 70's and New Social Movements of feminists, citizen groups, NPOs etc. has took place of that. Also ethnic, religious or cultural minorities are the one of the important actors among them. Alevi has been formed as the collective identity in urban that refer to "given" communal identities in rural Turkey, so that it provides the significant unity for the people who regards oneself as an Alevi. It can be said that they are formed as the "Minority in Europe" which negotiates with society through opposition movement.

キーワード：マイノリティ，移民，アレヴィー，新しい社会運動，ヨーロッパ人類学

Keywords: Minority, Migrants, Alevi, New Social Movement, Anthropology of Europe

* 京都文教大学人間学研究所；Institute for Cultural and Human Research, Kyoto Bunkyo University, 80 Senzoku, Makishima-cho Ujishi, Kyoto 611-0041/ ishinsak@yahoo.co.jp

問題の所在

本稿では、ドイツにおける「アレヴィー (Alevi)」関連団体の形成と、それに関与したある人物の経験から、ポスト冷戦期ヨーロッパにおけるある移民集団の「マイノリティ化」について検証する。ここでいう「マイノリティ化」とは、ある国家や社会において、文化や行動様式、アイデンティティなどを参照することで他の成員と自己を区別する認識を持つ集団やカテゴリーが、可視化し社会に認知されるプロセスを指す。

ドイツには約200万人のトルコ系移民が居住している。彼らの多くが1960年代を中心に外国人労働者として来独した人々とその家族など関連した追加移民の人々である。「トルコ系」という表現は、全体としてトルコ共和国出身者とその子孫という意味合いであるが、その下位区分としてトルコ社会のエスニック、言語、文化、宗教、さらには政治的な多様性を反映して、様々なサブ・グループが見出される。ここで取り上げる「アレヴィー」は、そのひとつである。

彼らは一般的にイスラームにおける一宗派集団として捉えられる。そこに準拠したトルコ社会におけるカテゴリー区分として、しばしば「アレヴィー／スンニー (Sunni＝スンナ派)」の2分法が用いられる。彼らは近年、トルコおよびヨーロッパにおいて急速に組織化を進行させており、ヨーロッパにおける組織化の主要なプロセスは文化的権利を主張する運動を含んでドイツを中心に進行している。トルコにおいても同様のプロセスが進行しているが、かつては左派的傾向を持った一定の政治的勢力としても認知されていた。

杉山は、1970年代からトゥーレーヌたちが検証してきた「新しい社会運動」について、文化的権利の主張を中心に置く運動を含んでいると指摘している [杉山2000]。トゥーレーヌは、歴史と社会の進む方向性を争うものとして社会運動を捉えてきたが [トゥーレーヌ1983]、実際にはそこまで至らぬ社会の中での「主体」の再構成と擁護の運動を含んでいる。それらを含めた「新しい社会運動」の担い手のひとつが「マイノリティ」である。マイノリティは少数派とも訳されるが、単に人口的に「少数」であることのみを指す概念ではない。その概念には数的な面と政治的な面が含まれ、政治的抑圧や経済的搾取、社会的差別など、社会的に不利な状況にあるという含みがある [Cashmore 1988: 191]。

さてトゥーレーヌは、階級闘争と革命により権力奪取と新たな秩序の形成を目指す、マルクス主義的発想の運動に対するオルタナティブとして、この社会運動を定位した。結果的に見て、社会主義を標榜する諸国家の多くにおいて、その体制が社会の方向性に関する議論を許さない硬直したものとなり、自己崩壊ないしは修正を余儀なくされた後に、様々な社会的差異に基づいたアクターによるアイデンティティ・ポリティクスの時代が来ることを予告した形となった [トゥーレーヌ1982]。そして現在、アイデンティティをめぐる様々な規定要素を参照して規定される「マイノリティ」という枠組みは運動の主要かつ有効な担い手として認知され、その

存在を軸として、前述の社会的に不利な何がしかの状況を巡って、種々の主張や「異議申し立て」が行われているということになる。

それらの議論を踏まえ、以下では、ドイツ在住のアレヴィーに、以前は左翼運動に関わりをもち、1980年のトルコにおけるクーデター前後に亡命した人々が含まれていることに着目し、彼らの展開した左翼活動とその後のアレヴィーとしての組織化の関わりを検証する。そのプロセスは、下記の二つの側面から理解されうるものと想定できる。即ち、①社会主義イデオロギーと階級闘争を基盤とした旧来の社会運動から、アイデンティティに基づく「異議申し立て」を動因とした「新しい社会運動」への移行、②ある文化的カテゴリーが、組織化を経て既成の社会に「異議申し立て」をし、交渉する主体へと「マイノリティ化」する過程、である。

アレヴィーについては、トルコの社会状況もあって近年まで現地調査に基づく研究はあまりなされてこなかった。国内では、佐島によって組織された共同研究 [佐島 2003; 2007] が端緒といえる。ドイツおよびヨーロッパでの調査は、ゾーケフェルトの業績が代表的であるが [Sökefeld 2002; 2004 他]、国内では、本共同研究において佐島および筆者によってはじめて行われた。また、アレヴィーと左翼運動との関わりを直接取り上げるのは本稿が初めての試みとなる。

なお、本稿は2005年3-4月、2006年2-3月にドイツのいくつかの都市でアレヴィー関連団体を対象として行った調査による知見を基に構成されている。本調査は現在も断続的に進行中である。

II アレヴィーとその運動

1 アレヴィーについて

アレヴィーとは、トルコにおける少数派ムスリムである。ただし、地域的にはトルコだけでなく、イラン、ギリシア、ブルガリアなど旧オスマン帝国の領域に広く分布している。言語的にはトルコ語話者が多数だが、クルド語等他言語の話者も存在する。アレヴィーの指し示すところは「アリーを信奉する人々」というような意であるとされる。第4代正統カリフにしてシーア派により第1代イマームとされるアリーへの思慕を、その信仰体系の重要な要素として包含するため、しばしばシーア派の分派として語られることがあるが、実践においてはより独自性が高く、自己認識においてもしばしばシーア派との差異が強調される¹⁾。

1) 神秘主義教団「ベクタシ教団」の流れを汲むという、「ベクタシ (Bektaşî)」と呼ばれる人々も隣接、もしくは同様のカテゴリーとされる [Melikoff 1998: 5]。ベクタシの理念を総合してベクタシリッキ (Bektaşilik) という。

共通する教義や教団組織，典礼様式は見出し難いとされるが，男女が一緒に参加するジェム（Cem = アラビア語起源の「集会」の意）とよばれる儀礼を中心とした口承による文化が特徴である。ジェムは，様々な唱え言や楽器演奏，セマー（Semah）と呼ばれる儀礼的パフォーマンスなどで構成される。そこには，説話や詩などの知識が含まれ，構成や内容は，デデ（Dede）と呼ばれる精神的指導者（主として家系に基づくが，それ以外の要素も含む）の知識に依存している。それらを含む彼らの文化は，全体的に見て秘儀的要素が強く，地域偏差がある。それらの理念的全体像を漠然と称して，アレヴィーリッキ（Alevilik = アレヴィーであること，その思想と実践）と表現される。

アレヴィーというカテゴリー全体を通じた組織は本来存在せず，地域共同体単位で構造化された存在であったと考えるべきであろう。主な社会組織はオジャク（Ocak）と呼ばれる出自集団である。その出自に対する認識は現在でも見られる。この出自集団が，トゥルベ（Türbe）と呼ばれる聖者廟を中心とした聖者崇拜と結びついて構造化されるのが，アレヴィーの地域共同体の理念型である。

最も重要な聖者とされるのは，アリー，ハジ・ベクタシ・ヴェリ（Hacı Bektaş-ı Veli = 13世紀の聖人。アレヴィーリッキの始祖とされる），ピール・スルタン・アブダル（Pir Sultan Abdal = 16世紀の高名な吟遊詩人）らであり，吟遊詩人や音楽家，詩人など，芸術に携わるものにはアレヴィーが多いとされる。

彼らの人口は，450万から1800万，あるいはトルコの全人口（約7000万人）の10%ないし20%など諸説あるが，決して少なくはなく，潜在的にトルコ社会の動向に関与して重要な役割を果たしてきたとすることができるだろう。彼らはケマル・アタチュルク（Kemal Atatürk）による建国の理念，およびそれを標榜する共和人民党の重要な支持者とされる一方，しばしば共産主義者という代名詞を与えられてきた。

また，1978年のマラシュ事件（後述），1993年のシヴァス事件（マドマク事件）²⁾といった騒乱事件で犠牲者が出るなど，非抑圧的立場にあると捉えられてきた。全体として，宗教的分派であるかエスニックグループであるか，地域カテゴリーであるかそのとらえ方は難しい。当事者の言説でしばしば「アレヴィーはアレヴィーである」とされるように，エミックにはそれらの要素を総合的に参照する地域共同体的なカテゴリーとして捉えられている。

2) 1993年7月2日，アレヴィー関連の文化イベントのために参集していた芸術家や著述家らが滞在していたマドマク・ホテルをイスラーム主義者および右派の群衆が襲い，放火。37名が死亡。著名人の含まれていたこの事件の反響は大きく，以後アレヴィーの存在がトルコ社会で認知され，その独自性発露が容認される契機となったといえる。

2 トルコ統一党 (Türkiye Birlik Partisi)

トルコ統一党 (統一党) は、アレヴィーによって設立されたおそらく唯一の政党である。この政党は、1960年代の第2共和制下に登場し、のち1980年クーデターの結果解散となった。ここでは、Ata [2006], Bozkurt [2000], Kaleli [2000], Yalçınkaya [1996] らの記述をもとに、この政党の変遷を通してアレヴィーの運動の一側面を見てみたい。

1960年の軍事クーデターまでのトルコは、ケマル・アタチュルクの建国の理念「ケマリズム」を体現する共和人民党の一元独裁体制に始まり、複数政党制に移行した1950年代においても民主党の独裁的な政治が行われた。その反省から、1960年クーデターを受けて制定された新憲法は権力の分散や言論の自由に配慮した比較的民主的なものになった。これを受けて、第2共和制下のトルコは、多彩な思想やアイデンティティに基づいた政治的運動が展開される時代となった。スレイマン・デミレル (Süleyman Demirel) の公正党 (Adalet Partisi), 極右の民族主義者行動党 (Milliyetçi Hareket Partisi), イスラーム主義的傾向を持つネジメッティン・エルバカン (Necmettin Erbakan) の国民秩序党 (Milli Nizam Partisi) など、現在に至るまでトルコの政治に重大な影響を与える諸勢力が出揃うのがこの時期である。

一方この時代は、トルコ史上で最も左翼勢力が表舞台に現れた時代でもあった。その要因として、全世界的な左翼運動の隆盛とともに、知識人や都市住民を支持基盤とする共和人民党が左派的傾向を見せ始めたことが、左翼勢力に有利な状況をもたらしたことも指摘されている [新井 2001]。1961年には、共産主義政党であるトルコ労働者党 (Türk İşçi Partisi) が結党、その影響下で67年には「革命的労働組合同盟 (Devrimci İşçiler Sendikaları Konfederasyonu = DİSK)」が結成され、過激な労働運動を展開した。彼らはのちに勢力を増す極右のテロ攻撃にさらされながら、自らも一部過激化し、深刻な社会不安を招くことになる。このような社会状況の下、(トルコ) 統一党も登場したのである。

統一党は、16名の同志によって、1966年10月17日に誕生した。最初のプログラムにはトルコ建国の理念たる共和人民党6原則 (6本の矢) が引用され、「改革主義, 進歩主義, トルコ主義, アタチュルク主義」といったスローガンが掲げられていた。このスローガンは、アレヴィーについてしばしば言及される、世俗主義の支持者にして共和国理念の信奉者であるという言説を裏付けている。

その一方、12イマームを象徴する12の星とアリーを象徴するライオンがあしらわれた党のシンボルマークが、この政党がアレヴィーたちを基盤としていることを示していた。そして、信仰と良心の自由を強調し、公的秩序, 道徳, 法と調和した信仰実践の自由を主張していた [Yalçınkaya 1996: 192]。その点では宗教的マイノリティとしてのアレヴィーの利害を代表する側面も当然ながら備えていた。また結党初期においては、執行委員の多くは農村出身者で占められ、デゼ達が必要な役割を果たすなど、「伝統的」側面が色濃く反映していた。

結党の動機は、世俗主義の現実的方策として宗教の国家管理を行う宗務庁のあり方に関して、「信仰集団間の均衡と平等を保障し、それらの信仰と信教の自由を尊重した形での」組織構成を要求することであったという [Ata 2006: 45]³⁾。この時代、60年クーデターで打撃を受けたとはいえ、50年代に息を吹き返したイスラームの影響力は、衰えを見せてはいなかった。統一党結党の3年後にはエルバカンの国民秩序党も登場する。クーデター後に政権を取り戻した共和人民党も妥協的姿勢を見せざるを得ない中、イスラームの力、即ち、トルコの文脈ではマジョリティであるスンニーのイスラームの社会的力がこれ以上増すことへの恐れが、アレヴィーとしての行動に結びついたものと考えられる。

1968年の上院および地方選挙において、同党ははじめて選挙に臨み一定の成果を挙げた。さらに翌69年には国会議員選挙が行われた。この選挙では、候補者名簿の上位にハジ・ベクタシ・ヴェリの家系と目される者やデデの家系などからの候補者を立て、「伝統的」側面が前面に出されていた。ここでは2.8%の得票率で、アマスヤ、トカト、チョルム、イスタンブル、マラテヤ (Malatya)、アンカラ、シバス (Sivas) といったアレヴィーの多い各県から、8名の国会議員を送り出した (ひとは翌年死亡)。この結果は驚きをもって迎えられた。他党もアレヴィーが有力な票田であることを意識し、特に左派系の政党を中心にアレヴィーの候補を立てるなど一定の配慮を見せていた。その状況でこの結果は予想外の健闘と見られたのである。しかし、党内では、背景とするアレヴィー人口を考えると物足りないものと受け取られた。

この結果に不満な勢力の後押しで、第3代党首に就任したのが、若手の国会議員ムスタファ・ティミシ (Mustafa Timisi) であった⁴⁾。彼は、トルコ統一党は宗派政党ではないとの主張を掲げ、信仰に基づく活動以外の政党活動を重視する構えをみせ、知識人層にアピールしようとした。翌70年に準備された政策要綱には、アタチュルク革命の継続と再現といった行動主義的な内容や、「宗教信仰と唯物論哲学に同等の敬意を」払うといった表現が現れた。一方で、あらゆる信仰の平等な代表たる機関の設置といった当初の目的は放棄され、「世俗的な共和国に宗務庁は無用」と総括された [Ata 2006: 47]。この綱領は結局採択には至らなかったが、この時点で当初の結党目的から離れ、イデオロギー的色彩を強める方向に向かったと言える。

そうした中同じ70年に、国会議員7名のうち党首ティミシとイスタンブル選出の一名を除く5名が、党執行部の決定に反して保守系のデミレル内閣の予算案に賛成票を投ずるという事態が生じた。これはそれまでのアレヴィー社会の傾向と統一党の主張から乖離した行動であっ

3) その背景として、宗務庁長官イブラヒム・エルマル (İbrahim Elmali) による、「アレヴィリッキは終わった」との発言があったこと、また、都市へ流出したアレヴィーたちのアイデンティティの高揚とその受け皿としての側面も指摘される。同じころに、雑誌や新聞の発刊も行われた [Kareli 2000: 32]。

4) 彼は貧しい出自で、シヴァスのゲジェコンドゥ (Gecekondus=一夜建て: スクウォッター地域) に住み、「電話のないただ一人の議員」と言われたという [Ata 2006: 47]。

た。この5名がこのような行動をとった背景には買収があったとされる [Bozkurt 2000: 84] 一方で、「統一党をトルコ労働党に類似した党に転回」させようとする流れに抗して、「民主主義を擁護する」立場を表明する意思があったともいう [Ata 2006: 49]。

これに対し、特に若年層からの激しい非難を背景に、党執行部は彼らを綱紀委員会にかけ、除名処分とした。これによって、同党における「伝統的」側面の影響力が決定的に弱体化した⁵⁾ 結果、左翼的思想に影響された勢力によって中枢が占められることとなった。

翌71年には名称をトルコ統一党と改め、1973年の選挙では71年に解党となった旧トルコ労働者党勢力の支持層を取り込むべく選挙協力を行った。この選挙での党の路線は「左派民主主義」であったが、それを12の原則で示していた。この12原則にはそれぞれ左翼思想からの解釈が加えられていた一方で、12という数字は12イマームになぞらえたものでもあった [Ata 2006: 49]。選挙結果はしかし、思わしいものではなかった。それは、右派政権成立の懸念と、71年「書簡によるクーデター」の影響により、左派票の多くが手堅く共和人民党に流れたことが原因とされる。トルコ統一党は1.1%の得票率にとどまり、ようやく党首ティミシひとりが当選したのみであった。これ以降、党は求心力を弱めていく。アレヴィーの「伝統的」勢力は共和人民党支持に流れ、左派的な若年層は独自の路線を模索し始めていた。

1977年の選挙では、単独で選挙に臨むことが難しいとの判断から、共和人民党に選挙協力を求めたが、不調に終わる。そのため、党組織自体に綻びが生じたトルコ統一党は、唯一の議席も失い大打撃を蒙ることとなる。この大敗を受けて、選挙時に非協力的であったとして婦人、青年部を解散するとともに、規約が改定され、「革命主義、社会主義、愛国運動の拡大」と「その政治的力への転換」を謳うこととなった [Ata 2006: 44]。

このように、初期の共和国理念の堅持によるアレヴィーの利益擁護といった立場から、時を追うごとに過激化し、左翼的色彩を強めていったトルコ統一党は、1980年の軍事クーデターで他の政党とともに解散を命ぜられた。全政治家が一時公職を解かれ、左翼活動家ら（右翼、イスラーム主義者も同様ではあったが）が大量に逮捕されたこのクーデター以後、アレヴィーによる政治的活動は鳴りを潜めることになった。

3 左翼運動との関わり

トルコ統一党の歴史から垣間見ても、アレヴィーの少なくとも一部、特に若年層が左翼運動

5) この5名のうち3名がハジ・ベクタシ・ベリの末裔と目され、ハジ・ベクタシ・デルガフ (Dergah) の長 (Postnisin) に列するウルソイ (Ulusoy) 家の一員であったことで、ベクタシの一部からの支持が期待できなくなったという [Bozkurt 2000: 84-85]。しかし一方で、彼らの除名を一般党员やアレヴィー社会に説明する際、デュシュキュン (düşkün = 共同体からの追放) という、信仰に関連した「伝統的」表現が用いられていた点は興味深い [Ata 2006: 49]。

と関わりを持っていたことは確かである。60年代から70年代にかけて、アレヴィーの若者たち、特に都市に移住した者たちの間に唯物論的思想が広まり、同時にアレヴィーリックへの否定的姿勢が広まった。それはデデたちの権威の否定や、ジェムの軽視といった「伝統的」側面への攻撃と決別の姿勢として現れた [Yalçınkaya 1996: 192]。また、トルコ統一党の性質の変化とも連動している。いずれにせよ、この時期このような状況があったことは、現在に至る経緯と考え合わせると興味深い。

さて、スンニー・ムスリムがドミナント・グループを形成するトルコ社会において、「ケマリズム」の主要な要素である「世俗主義 (Laiklik)」は、アレヴィーの社会的地位の安定を保証する思想でもある。第2次世界大戦後の複数政党制への移行と、民主党政権の誕生によって、「イスラームの復活」と呼ばれる事態が生じ、共和人民党が野党に転落したことは、彼らにとって不安な状況をもたらしたといえる。この意識は投票行動に表れ、アレヴィー人口の多いいくつかの県では共和人民党が多く票を集めることになったが、民主党が長期政権化した事實は、通常の選挙制度の下で彼らの意思を反映させることの難しさを示していたとも言える。

1960年代の第2共和制のもとで、政治的姿勢において、アレヴィーは二つの方向性に分裂していった。ひとつは、「伝統的」信仰形態と共同体秩序をアイデンティティの核としつつ、世俗主義に期待する従来の方向であり、それは共和人民党の「中道左派」路線の支持層を形成した。そしてもうひとつは、若年層を中心に進行した左翼的思想への傾倒であった。

背景には、民主党政権下で本格化した農村の市場経済への組み込みと農民の労働者化、そして遊牧民の半強制的定住化といった、多くのアレヴィーを含むアナトリアの小農民を襲った共同体解体の流れがあった。そして、多くのアレヴィーが都市に労働者として流出し、ゲジェコンドゥ (Gecekondu = 一夜建て: スクウォッター地域) の住民となり、最下層の労働者となっていた。さらにその一部は、折りしも募集がたけなわとなっていた、ヨーロッパへの出稼ぎ労働へと向かうのである [Yılmaz 2005: 131-141]。

そのような状況下で、当時労働者層に強い影響力を持っていた左翼思想と出会い、階級闘争に活路を見出そうとした人々があらわれた。そこでは、アレヴィーというアイデンティティのみに拠って主張するより、階級的連帯によって多くの人々と力を合わせるほうが、より強い力となるという意識が働いたと考えられる。実際、統一党結成の前年、1965年の選挙で、トルコ労働者党は全国平均で3%の得票を得ているが、アレヴィーが多く居住するトゥンジェリ、カルス (Kars)、ヨズガト (Yozgat) など東部の各県では、5%以上の票を得たという [Yalçınkaya 1996: 191]。それらは、都市的状況下で惹起された新たな方向性であった。一方でゲジェコンドゥは出身地の言語、エスニック、信仰などのアイデンティティを反映しつつ、左右両陣営の草刈場となるといった、複雑な様相を見せるようになる。そして、特に1970年代の経済低迷と政治的混乱の中、トルコ社会はテロの応酬と泥沼の闘争に入っていく。

その一方の主演として登場したのが、アルパスラン・トゥルケシ (Alparslan Türkeş) の民族主義者行動党である。かつて戦時下で親ナチス運動を展開し投獄され、60年クーデターを主導しながら暴走し更迭された旧軍人であるこの指導者の下、彼らは汎トルコ主義的トルコ・ナショナリズムと反共主義を掲げ、「灰色の狼」と名乗る私兵組織を形成して、左翼勢力に対する武装闘争を繰り広げていた。と同時に彼らは1975年、デミレルの「民族主義者戦線」内閣に参画して国政の中枢に食い込み、警察組織を実質的に傘下において左翼に対する圧迫を強めていった。この内閣にはエルバカンの国民救済党も参画し、彼はトゥルケシとともに副首相を務めた。この2つの勢力は議会内少数派ながら、共和人民党と公正党の政権争いの中でキャスティング・ボートを握り、影響力を強めていった。この図式は現在のトルコ政局にも引き継がれている。

この状況は、71年の「書簡によるクーデター」時にトルコ労働者党は解体、党首逮捕と厳しく罰せられたのに対して、国民秩序党は閉鎖されたがエルバカンは処分されず、民族主義者行動党はそのまま存続となったことからわかるように、軍をはじめ社会的にも左翼に対する警戒心が勝っていたことから招かれたものであったといえる。アレヴィーであるとともに左翼信奉者となっていたアレヴィーの若者たちは、いわば「2重苦」の状態に陥り、追い詰められていった。

そうした中、「灰色の狼」と極左のテロ合戦が繰り広げられた。注意しなければならないのは、このテロ合戦においてしばしば「スンニー対アレヴィー」という構図が持ち出されていることである。アレヴィーはいまや左翼の代名詞であり、この対立は左右両派のイデオロギー対立のみならず、宗派對立の様相を含んで人々の激しい憎悪を引き起こした [山内 1987: 218-219]。

1978年には、マラテヤ (Malatya)、マラシュ (Maraş)、シヴァス (Sivas) といった都市で衝突が繰り返された。1978年4月17日、民族主義者行動党シンパのマラテヤ市長が小包爆弾で暗殺されると、これをアレヴィーの仕業とした人々がアレヴィーの居住地域を包囲、翌18日武装した「ファシスト」集団によって、放火と略奪が行われ、9人が犠牲となった。これに先立って左翼系新聞に送られた犯行予告には、ある「革命家」の暗殺が「スンニー」によって行われたものと示唆し、「アレヴィー対スンニーの闘争を開始」といった表現がなされていたという [Bozkurt 2000: 92-93]。また、シヴァスでは、9月3日にちょっとした喧嘩から始まり、「灰色の狼」がアレヴィーの家々に放火するなど数日間の騒擾の末、12人が犠牲になった。この際にも「ムハンマドのウンマに、コミュニストとクズルバシュ (アレヴィーの別称) に対する聖戦を呼びかける」などといった表現が用いられたという [Bozkurt 2000: 96]。

最も甚大な被害が生じたのは12月22日から24日にかけてマラシュで起こった騒乱である。マラシュでは、4月にマラテヤ同様小包爆弾事件が起きて以来、左右両派の衝突が繰り返され

ていた。12月22日、この衝突で死亡した左派系教師の葬儀への「灰色の狼」の襲撃から始まった騒乱は、2000人規模の「スンニー」暴徒によるアレヴィー地区への襲撃へと発展し、100名以上の死者と1000人以上の負傷者を出す、史上稀に見る大惨事となった。この事件をきっかけにいくつかの県で戒厳令が引かれるに至ったが、この年のテロによる死者は1000人に達し、翌79年にはさらに増加することになる。このような未曾有の社会不安と経済の破綻が、軍をして1980年のクーデターによる事態収拾を決断させることになるのである。

統計的に確認する手段はないが、このクーデター前後に、当局による摘発を恐れてヨーロッパへ逃れてきたアレヴィーの若者や活動家が多くいたとされている。また、80年代のトルコの状況はアレヴィーとしてのなんらかの活動や主張を展開することを難しくした。その間にアレヴィーリッキは、地域共同体を離れた都市的文脈において再構成され、変貌しようとしていた [Bozkurt 2000: 117-132]。そのプロセスは、ドイツをはじめとするヨーロッパにおいても進行していった。そのことは後のアレヴィーのあり方に新たな側面をもたらした。

また、この間に、社会主義は社会変革運動の思想的指針としての力を急速に失っていった。それに変わって、文化やアイデンティティ、社会的差異や個別の問題意識を参照し、「異議申し立て」を行う「新しい社会運動」へと変革運動の形態が変化していた。次章で扱うアレヴィーの組織化は、この運動形態の変化とリンクして、それを担う主体として自己形成する過程として捉えることができる。

III ドイツにおけるアレヴィーの組織化

1 ドイツにおけるアレヴィー団体の形成と発展

ドイツにおけるアレヴィーの組織化は、1970年代に設立された愛国者協会連盟 (Yurtseverler Birlik Federasyonu) から始まったと考えられる。聞き取り調査によれば⁶⁾、この組織はマラシュ事件をきっかけに、トルコ統一党の海外組織として設立されたという。ベルリンなど主要な都市に団体が存在し、雑誌の発行などもしていたようだが、さしたる活動はなかったようである [Gül 1999: 84]。そして、80年のクーデターによってトルコ統一党が解散となるとともに、活動は終息していった。

その後、80年代を通して目立った活動は見られなかったが、1987年から88年ごろに、再び組織化の動きが出てくる。ギュルによれば、この時期に、いくつかの都市で、ハジ・ベクタ

6) 2006年3月、「アナトリア・アレヴィー文化センター・ベルリン」にて当時のメンバーから聴取。この団体は当時のメンバーの認識ではベルリンの愛国者協会の後身となる。ベルリンの愛国者協会は1978年、マラシュ事件をきっかけに結成されたという。

シ・ヴェリ協会などとして団体が形成されたという [Gül 1999: 87]。また、ベルリンやミュンヘンではかつての愛国者協会以来のグループがなんとか活動を維持していた。この間、有志のデデたちが、アレヴィー組織化のため奔走した [Kaleli 2000: 73]。

そして1988年12月、12名の有志によりハンブルグで発足した「ハンブルグ・アレヴィーベクタシ文化グループ (Hamburg Alevi Bektaşî Kültür Grubu)」⁷⁾により、「アレヴィー」の名を冠した団体の結成が決定された⁸⁾。1989年には「ハンブルグ・アレヴィー宣言 (Hamburg Alevi Bildirgesi)」を作成するとともに、10月には、ドイツとトルコから文筆家や芸術家などを招いて、「アレヴィー文化週間」が開催された。このイベントはベルリン、ケルン、などでも開催され、のべ20000人を動員したという [Gül 1999: 94]。

これらの活動が、アレヴィーの本格的な組織化の端緒になったとされている。そして、それを基盤に、ハンブルグ・アレヴィー文化センター (Hamburg Alevi Kultur Merkezi) が設立された。また、他都市でも団体が設立された。

1990年5月27日、これらの団体がドルトムントに集まって、ドイツ・アレヴィー信徒団体連盟 (Almanya Alevi Cemaatları Federasyonu) の初の総会を開催した。これが、現在のアレヴィー協会連盟 (Almanya Alevi Birlikleri Federasyonu = ABF) の出発点であるとされる。団体としては翌91年1月に、規約を整え団体法の認可を得て正式発足となった。この時点で本部はマインツに置かれた。

しかし、連盟の名称にある Cemaat (信徒団体) が、宗教的連想をもたらすことや「アレヴィーを最もよいイスラーム」であるとする主張に関しては議論があった。これらの経緯から、アレヴィーリッキを独立した文化とするかイスラームの文脈において捉えるのかという議論が、組織化の当初から行われていたことが推察できる。また、初期の組織化を主導したデデたちは、宗教的な視点に立っていたと考えられるが、主導する勢力の世代交代とともに組織の性質も変化していく⁹⁾。

こうしたなか、トルコでは1993年7月2日にシヴァスでマドマク事件が起こった。トルコと同様、ヨーロッパでもこの事件への反響は大きく、ドイツをはじめ、オランダ、スイス、イギリス、フランスなど各地でアレヴィーの団体がマドマクで生き残った芸術家や文筆家、その

7) この時のメンバーに現代表トゥルグット・オケル (Turgut Öker) や機関紙『アレヴィーたちの声 (Alevilerin Sesi)』現編集長イスマイル・カプラン (İsmail Kaplan) らが含まれている。

8) この頃まで、ヨーロッパにおいて、「アレヴィー」の名を冠した組織や団体が形成されることはなかったという。これは、80年代のトルコにおいてアレヴィーをなめる組織の形成が違法扱いとされていたためと説明される。

9) アレヴィーリッキとイスラームとの関係をめぐる議論や連盟の戦略の内容については、より検討を要する。また、本稿の紙幅においてこの議論自体を取り上げるのは不可能であるため、今後の課題としたい。

他の人々を呼び寄せるなどしてさまざまな活動を行った。この事件の重大な結果と、その後の経過の中で、多くのアレヴィー住民の気持ちが突き動かされ、結束と組織化の必要性が認識された。その結果、以前より大規模かつ迅速に組織化が進むこととなった。

その結果、1993年10月30、31日に行われた総会には36団体の参加を見た。ここでかねてからの議論を踏まえて、連盟の名称をドイツ・アレヴィー協会連盟とし、さらに組織化をおし進めることが決議された。また、この総会の後、本部をケルンに移した。ここにおいて、連盟の名称から、Cemaat（信徒集団あるいは教団）という宗教的な用語がはずされ、Birlik（集合体、団体ないしは連合）という一般的な用語に変更されたのはその後の連盟のあり方を見ると示唆的である。ここには、アレヴィーリッキを必ずしも宗教的なものだけではない、様々な意識を包括的に参照した統合理念として解釈しようとする意識を見て取ることができる。そして、この後連盟が、音楽や舞踊などトルコ文化の諸要素を担う主体としてのアレヴィーの性格を強調し、アレヴィーリッキをイスラームの一宗派ではなく、包括的な文化的概念として提示し、イスラームとの関係を対等な次元で語る戦略に進んでいく出発点と捉えることができる。一方では、アレヴィーをイスラームの枠組みにおいて捉える人々や、信仰としてのアレヴィーリッキを強調する人々はこのような連盟のあり方に違和感を持つようになる¹⁰⁾。また、このような連盟の戦略に対する、左翼運動出身者の影響が、しばしば指摘される。

さて、連盟は、この新しい体制のもと、雑誌『アレヴィーたちの声 (Alevilerin Sesi)』の発行などを通してヨーロッパおよびトルコにおける影響力の拡大を図った。一年後には加入団体が100を超えるほどにアレヴィーの組織化は急速に進んだ。さらに、1995、96年頃までには、ヨーロッパに130余りの団体が形成されるに至る。そして、ドイツ、ひいてはヨーロッパ社会において、アレヴィーの存在が認知されていった。それにつれて、連盟はアレヴィーを代表して社会と関わっていく団体としての位置づけを強化していくこととなる。

1999年、前代表の辞任にともなって、ハンブルグ・アレヴィーベクタシ文化グループに参加していたトゥルグット・オケル (Turgut Öker) が代表に就任した。彼は、後述のM氏の話などによれば、左翼活動の出身者であり、新しい世代の指導者であった。これ以降、現在見られるような連盟の活動方針が形成されることになる。そこでは、ひとつの重要な目標として、ドイツの学校教育においてアレヴィーリッキに関する教育の導入が掲げられた。第1段階として、多くのアレヴィー人口を抱えるハンブルグとノルトライン・ヴェストファーレン州での導入を目指す計画に着手した。この計画に関連した活動において、ドイツ政府からアレヴィーの代表としての認知を得るため“アレヴィー共同体 (Alevi Toplum/ Alevitische Gemeinde)”の

10) 一方で、1995年にトルコで結成されたアレヴィー団体であるジェムワクフは、アレヴィーをイスラームの文脈におき、トルコ政府と協調する戦略で影響力を持ち、1996年ごろからドイツでの活動も行い、一定の支持を得ている [石川2007]。

名を用いることとした。以降、連盟のドイツ語名は Alevitische Gemeinde Deutschland となった¹¹⁾。

2000年5月13日、「千年の詩 (Bin yılın Türküsü)」と銘打ったイベントが開催された。これは、巨大なイベント会場であるケルン・アリーナに18,000人の聴衆を集めておこなわれた芸術フェスティバルであった。この巨大イベントの成功は、現在に至るトゥルグット・オケルを中心とした体制をゆるぎないものとしたと言っているであろう。これだけのイベントの成功は、連盟とその指導者たちに対する信頼感や、アレヴィーの持つ文化への自信を醸成したと考えられる。そして、アレヴィーの「文化」としての豊かさとコスモポリタニズムを強調することが連盟の常套戦略として定着し、以降、小規模な文化イベントは随時、そして2年に一度大規模なイベントを行ってきている。

また、2002年6月には、ドイツ、オランダ、デンマーク、スイス、オーストリア、フランスの連盟が参加して、ヨーロッパ・アレヴィー協会総連盟 (Avrupa Alevi Birlikleri Konfederasyon = AABK) が正式発足となり、トゥルグット・オケルが代表を兼任することとなった。現状、彼を中心とした体制は磐石といえる。この体制の下で、先述の文化活動やメディアを通じた情宣活動を継続していくとともに、ドイツにおける宗教教育に場所を得ることによって、キリスト教、ユダヤ教、イスラームと肩を並べる存在として認知されることを目指すこと、そして、デデたちの知識を集約し、統一された概念としてのアレヴィーリッキ、——即ちアレヴィーの文化、信仰と思想の体系および社会的カテゴリーとしてのアレヴィーのあり方——を確立し、これを若い世代に継承していくことが重要課題として設定された。

2005年3月26、27日には、アンカラで第1回アレヴィー会議 (Alevi Konferansı) が開催された。この会議には、AABKからの代表者と、トルコ側はABF (Alevi Bektaşlı Kuruluşları Birliği Federasyonu) の代表者に、国会議員、芸術家、ジャーナリスト、労働組合代表者などが出席した。また、そうした連携によって、トルコにおける宗教教育 (スンナ派イスラームを中心とした) の必修化やアレヴィーの村でのモスク建設を「同化政策」として反対する活動や、施設の建設、各種援助活動などでトルコでの影響力の拡大を模索しており、代表は頻繁にトルコを訪問している。

2 M氏の経験から

それでは、実際に活動にかかわる人々はどのように運動に入り、その性質を変化させ、また

11) Gemeindeとは、本来「教区」を意味するところから行政区分や地域社会などに意味を広げて使われる用語である。これを用いることで、ドイツ社会「公認」の宗教であるカトリックと福音派 (プロテスタント) のキリスト教諸宗派、ユダヤ教、そして学校でドイツ語による宗教教育が開始されるなど、徐々にその地歩を固めつつあるイスラーム (ことにスンナ派) に肩を並べる存在として、一定の社会的影響力を得ようとする意図を見取することができる。

アレヴィーとしての自己をどのように認知してきたのだろうか？ ここでは、聞き取りに基づいて、ドイツでの組織化のきっかけとなった、ハンブルグのアレヴィー文化センターにかかわってきたある人物の回顧からその経験を跡付けてみたい。

M氏は、1961年生まれ男性である。ひとりのアレヴィーの若者として、左翼運動の真っ盛りを経験し、80年のクーデター時にトルコを逃れてドイツにやってきた。そして、ハンブルグで初期から組織化に関与し、現在同センターの代表を務める。またアレヴィー団体連盟の代表トゥルグット・オケル氏の古くからの友人でもある。

以下、文中「 」内は彼の発言をほぼそのまま訳したものである。若干記述は混乱するが、大まかな流れを時系列で再構成し、関係の薄い部分や繰り返しを割愛した他は、なるべくM氏の話の流れに沿った記述とした¹²⁾。

2-1 トルコでの左翼運動

M氏は、1961年ヨズガット近郊のアレヴィーの村で生まれた。この辺りは、人口の30%がアレヴィーで、70%がスンニーであった。1960年代には、「アレヴィーリッキは村ではうまくいっていた」が、「町に下りるようになって難しくなった」という。そして、町に「下りた」アレヴィーたちは、多くが70年代を左翼運動の中ですごした。

12歳まで村で過ごし、「ジェムの中で育った」。4人の姉がいたが、両親が男の子を欲しがり、ハジ・ベクタシ (Hacı Bektaşî: ハジ・ベクタシ・ヴェリの廟がある町) へ赴き、願を掛けた結果、自分が生まれた。そのため、1歳半のとき、供犠を行うため、ハジ・ベクタシに再び赴いた。「そのような信仰のある家族の中で育った。ジェムを見て、デデやおじさんたちの信仰、アレヴィーの実践を見て育ち、「母は、朝、起きると太陽の光に向かって」、また、「夕方は月に祈祷 (Dua)」をしていた。後に「再び信仰を持つようになると」、母が「何を言っていたかわかるようになった」。

1974、5年ごろ、中学生のとき、左翼思想、共産主義運動と出会った。都市に「下った」者たちにとって、「都市には、自身の信仰とともに暮らせる環境がなかった」。その頃、「私たちのアレヴィーリッキは、禁止、あるいははばかれる形のものとして、また、アレヴィーリッキに言及すれば差別のもとで叩かれるものと、悪く理解していた」。しかし、人間は「人間の本性として、ある場、ある社会に属する」ことを望む。そのため、「われわれも、一部のスンニーの友たちも、この社会主義、共産主義思想を身につけた。「アレヴィーリッキを前面に出すよりも、社会主義者共産主義者の仲間と一緒にいることを選んだ。そのほうがより力強く望みをもてた」。

12) M氏へのインタビューは2006年3月に行った。

そのころはヨズガットの町にいた。親たちを村に残し、子供たちは12, 3歳で町に出た。「町でいくつか家を借りて、3, 4人のアレヴィーの子供が一緒に生活しながら、不安の中、学校へ」通った。しかし「最初の1, 2年は、よく叩かれた。アレヴィーだ、クズルバシュだといって、馬鹿にした扱いをうけ、偏見を持たれた」。「アレヴィーたちは母や姉と性的関係を持つなどと」言われており、「蔑まれ、それによって引け目を感じた」。実際は、「当然そんなことはないのだが、証明する者もいなかった。そのような差別の下で暮らしているときに、左翼思想、社会主義、共産主義が、スンニーの友との出会いとなり、我々にとって、ひとつの解放として感じられ、12人、20人のグループが、一瞬にして50人のグループとなった」。そうやって、「私たちは他の信仰に出会った。その信仰は何かといえば、カール・マルクスであった。社会主義、資本論、階級闘争だった」。

「カール・マルクスが言うには、『宗教はヘロインである』。『アッラーはいない』し、『宗教はない。すべて自然現象である』と。そうであれば、「信仰はより遠いものと考えることができ」、「アレヴィーリックに替えてイデオロギー、社会主義、共産主義」が優先する。そうやって、アレヴィーリックは外部化され、2次的なものとなった。そして「社会主義、共産主義は、我々にとってもうひとつの信仰となった」。「我々、特に街に下りた若い世代の、90%、95%が社会主義運動と出会った」。とはいえ、特に具体的な運動はしていたわけでもなかった。「単に本を読んだり、考えたり、集会に参加したり、壁に落書きしたりしていた」。

2-2 ドイツへ、そしてアレヴィーの運動へ

「1980年、まだ学生だった時、クーデターがあった。このとき、一部は刑務所に入れられ、一部はヨーロッパに逃げた」。トゥルグット・オケルとは、「26年、ずっと友人である。一緒に暮らし、一緒に食べ、左翼活動をした。自分もトゥルグットも逃げてきた。知り合ったのはこちらに来てからだ。同時にハンブルグに来て、知り合った」。それぞれ、80年のクーデターを逃れて、身内を頼ってやってきたのだという。トゥルグット・オケルは父が、M氏は姉がハンブルグに住んでいた。M氏は19歳だった¹³⁾。「ドイツでは何もなくて何もできなかった。両親もいないし、お金もないし、言葉もできない。トルコで大学に行こうとしていたが、そのままこちらに逃げてきた」。そして、難民申請をした。

「われわれの多くは、すでに政治活動をやめていた。多くの人々は空虚の中にいた。85、6年になって、社会主義が力を失い、既に立ちゆかないことを見て、それまでの運動を捨てた。他のアレヴィーの若者同様、社会主義が信仰となりえず、解放となりえないことを見てきた」。

13) 本項におけるトゥルグット・オケル氏に関する記述は、M氏の発言に基づくものであり事実関係の確認はできていない。

それが何もなさないことを見て知った。単なる美しい夢、よい外見だけのものであることを知った」。

そして、M氏は実業家への道を歩み始めた。一方トゥルグット・オケルは大学に進学し、教育学を学んだ。

「そのころ、トルコでは、急に、アレヴィーの村々にモスクが造られるようになっていた¹⁴⁾。我々の村にも、スンニーのモスクが造られ、スンニーのイマームがいるようになった。それが反発を生んだ。おそらく、何かを失うことを怖れたのかもしれない。そのため、私たちは急いで組織化を進める必要性があった。そして、「信仰心という点では信じていなかったのだが、アレヴィーであるというアイデンティティのために」、組織に加わった。そこには、「それを主導した我々より以前の年配の人たちがいて、その人たちには信仰の深い人たちが多かった」。そして89年に、アレヴィー文化週間が行われた。「アレヴィーが皆集まって、親交をもち、そのようにして、アレヴィーリッキは再び活性化した」。「それ以前にも活動はあったが、小規模で短命だった。10人、20人の集まりで、きちんとした組織ではなかった¹⁵⁾。我々がここでそのようなことをやってから、定期的に雑誌を発行したり集会をやったりし始め、少しずつアレヴィーリッキの組織化がはじまった」。

なぜM氏はこの活動に加わったのか。

「正確な数はわからないが、多くのアレヴィーがハンブルグにいる。「彼らの多くは、皆、どこか居場所を探している」。「85年ごろ、左翼思想が終わってから、人々は空虚の中にいた。居場所を探した」。「仕事も熱中するものもなく、信仰はパンや水のごとく必要なものだ」った。そのようにして、「人々は本来の生活に戻った」のだという。そして、アレヴィー文化週間では、「一週間、研究者や芸術家が集まって、2,000人3,000人規模のイベント」を行い、「初めてアレヴィー文化センターを作った。アレヴィーの名で、世界で初めて作られた組織だ。最初の代表はイスマイル・カプラン。のち、トゥルグット・オケルも代表をやった。のち何人かを経てここ数年は自分が代表をやっている」。

このような活動は、アレヴィーの子供たちのためであるという。「若者たちは、年配者よりも活発な活動があり、アレヴィーリッキを学びたがっている。このような場を求めている」。「彼らもどこか居場所を求めている。アレヴィー・アイデンティティについて知りたがっているし、身につけたがっている」。

14) これらの事柄については、事実の確認はできていない。ただし、現在に至るまで、アレヴィーの住む村々にモスクが建設されてきた例は多く見受けられる。

15) 「愛国者協会」の残党の活動を指すと思われる。

2-3 アレヴィーリッキへの覚醒

現在の「自分は、アレヴィーリッキを信じているところでこの活動をやっている。政治ではない」。しかし「1993-4年まで、無神論者だった。信仰はなかった。アレヴィーであることで組織のメンバーではあったが、信じていたからではなかった。アレヴィーであったからである。信仰でなくアイデンティティによるものだった」。

1994年、一時帰国したトルコで、M氏はある体験をする。

「母をヨズガットからアンカラへ連れて行くためにトルコに帰った。車でアンカラからヨズガットへ行き、母を拾ってアンカラへ向かった。ヨズガットからアンカラは、車で250キロある」。姉とその夫も同乗した。途上、「2台のトラックを抜かそうとして、140キロで反対車線に出た」。すると、「向こうから一台の車が来るのが見えた。スピードを見たら140キロだった。少し登っている道路で対向車はその上から下ってきている。左は大きな崖で、谷になっている。右はトラックがいる。瞬間笑いがこみ上げながら「死ぬな」と思った。死の匂いを感じたようだった。一瞬で子供時代に戻った。ハジ・ベクタシのデルガフ (dergah = 修行場) で犠牲をささげているシーンを見た。そこから人生が始まったのだ。1歳半の時。それからすべてを見た。32年の人生をすべて見た。自分たちがどうなったかわからなかった。何か黄色いものの中にいる感じがあった。しばらく後、2人の娘、その時上が7、8歳、下が1歳、その2人の娘が真っ白な光の中に見えるように見えた。手に手をとって。「お父さん、私たちを置いてどこに行くの?」と言ったような気がした。そして衝突した」。

「ひどい事故で車は大破した。死んだと思った。しかし気がつくとはほとんど何ともなかったようだった。自分は何ともなかった。母も同乗者もみんなほとんど無傷だった。ただ自分の足の骨に少しひびが入っただけだった。事故を起こした相手の人たちは非常に信心深い人たちだった。彼らも一人が骨折しただけだった。彼らは車ごと30m飛ばされた」。積み上げた藁の中に落ちたために奇跡的に怪我がなかったらしい。「彼らの信心深さが、ハジ・ベクタシの見方に関して私に影響を与えた」。

その後M氏は、自分とアレヴィーリッキ、ベクタシリッキとの縁を意識し始める。

「2、3日後に偶然、ある人が私と知り合いになりたいと言って来た。興味がなかったが、その後、たまたまその人の事務所の前を通りかかった。行って見て、その人と会ってみた。その人はハジ・ベクタシ・ヴェリの子孫つまりチェレビル (Çerebiler) の家の出だった。そういう人と知り合いになった。しかしそれも自分にとって偶然ではないと思っている。その人は、私に愛 (Aşık) について話をした。愛とは何かを」。その人は当時60歳の女性だった。彼女は「人生で10の愛を知った」と言った。注意深く話を聞いた。「第一に、ハジ・ベクタシ・ヴェリを愛した」と言った。第二に娘、そして、母、父、というように、愛を語った。語りながら涙した。話しながらずっと泣いていた。そのような信心が私に影響を与えた」。その後何

年かの中に、いろいろな人々と偶然に出会った。「デデ、ピール (Pir = ジュムを主催するデデ)、いつも偶然に一緒になった。そうして皆、次々と、自分によりよくアレヴィーリッキを信じるように方向付けた」。そうした中、「わが友トゥルグットとは続けて関係があった。彼から私に依頼があった。ここ (ハンブルグ・アレヴィー文化協会) で役員会の仕事をできないかと。そうして7、8年役員をやり、うち4年は代表を務めている」。

「守護聖人 (Hızır) が、私に信仰を与えてくれる。信仰のおかげで幸せだ。信仰を得てから、食べ物の味がわかるようになった。食べたりんごの香りや味を感じる。人間は信仰によってよりよく愛することができる。子供をよりよく愛する、自然をよりよく愛する、全てよりよく愛することができるのだ。信じていなかったときは、私は酷薄だった」。今は、「誰かの何かをとるようなことはしたくない。人をだますようなことはしたくない」。「商売の時でも、そのために、誰かを巧みにまるめこんだりはしない。もっとも正しいと思われることをやるように努力している。なぜなら、私は、自分の中の自分と調和するように心がけているからだ。死ぬときに安らかでいたい。これも、私に信仰がもたらしたすばらしいことだ。ほかにもいろいろある。信仰心を持つこと、または他の考え方など、いろいろ変わったことがある。信仰心がもたらしたことだ」。

IV 考察

そもそもアレヴィーとは、ある一定の信仰形態をもった複数の地域共同体の人々を総称する他称であったと見るのが妥当であり、統一的なアイデンティティを持っていたとは言い難い。彼らの組織化は主として1980年代以降に行われたと考えるべきであり、「アレヴィー」の名を冠した組織はドイツにおけるアレヴィー団体連盟関連の諸組織の形成がはじめてであるとされている。

この団体の形成に、左翼活動の経験者が関与していることは多くの人々が指摘するところである。一方で「伝統的な」アレヴィーの求心力はデデの権威にあるとされ、組織化に際しても有力なデデの尽力があったことが指摘される [Gül 1999; Kaleli 2000]。傘下諸団体の日常の活動においても、儀礼等ではデデの知識に依拠し、またその権威には配慮が見られる。しかし、団体規約においては団体におけるデデの優越性は規定されておらず、執行部人事などにその理念が反映されることもない。執行部はアレヴィーという名を冠しながら、その「伝統的」秩序とは別次元で構成された社会的アクターとして、活動を統括し社会へ働きかけていくスタンスを取り、デデらを含むメンバーたちは好むと好まざるとに関わらず、その「腕力」に期待し、依存している構図が垣間見える。

また、現在の執行部が「ハンブルグ・グループ」の流れを受けるものであり、信仰集団とし

てよりも包括的な「文化」の独自性を強調するスタンスを見ても組織化の様式は彼らの主導によるものとみることができる。その様式は、マイノリティ集団としてのアイデンティティに依拠した異議申し立て運動であると言えるだろう。そうしてみると、彼らにとって組織化の結果立ち現れた包括的カテゴリーとしての「アレヴィー」とは、かつて彼らが生きていた「村」をイメージした共同体的様相を帯びながら、既にそれ自体が完全なる同一性を保障してはいない。そして、組織自体は自発的結社の形態をとる。それらの点で、一種の公共的空間として構成されていると言える。

彼らの団体組織は、属性として解釈される所与の共同性を基盤にしている点で共同体的であるが、イデオロギイの様相を持った多様な目的を帯びた個人が集う場でもあるのである。しかし、そこに集う理由は、共同体的「名」の使用であり、彼らはその「名」において社会＝公共的空間に場を得て、交渉の場に席を得る。交渉主体の「名」としての「アレヴィー」であり、その「名」に人々は集い、自己形成するのである。現実はその交渉を担うのは、彼らが形成した団体なのであり、組織化によってアレヴィーは団体の名称にもなったのである。団体としては、「文化的マイノリティ」という位置取りを社会に表示する。

そして、その組織は「単に目標達成のための『道具的』存在ではなく、そこではその運動自体が目標となり、また、「運動の形式そのものがメッセージとなり、支配的コードへの象徴的挑戦」となるという、メルッチの「新しい社会運動」の図式が描出される [メルッチ 1997: 64-65]。基礎となる「アレヴィー」のアイデンティティは所与のものではなく、メルッチの言う、「相互に交流している諸個人によって生み出される、相互作用的でありかつ共有された定義」として構成された集合的アイデンティティであろう [メルッチ 1997: 29]。

この集合的アイデンティティは、実際に存在した共同体を下敷きにしているため、行為者に非常に強い同一性の感覚をもたらす。M氏は、イデオロギイからアイデンティティに運動の動機をシフトしていく中で、日常と運動が連動する感覚を獲得していった。「信仰」を得て、イデオロギイに没入していたときよりも日常の感覚—りんごの味—を感じながら、その味の源を根拠として運動を展開する。そこにあるのは日常と運動が連動する感覚である。

いみじくも1980年にトゥーレーヌは、「社会主義は、社会進歩の普遍的なプロジェ [提案] の担い手であることを次第にやめ」、「指導者や国家の強大かつ策略的な言動に易々として屈従していく特殊な利害集団の、分節に富んだ防衛手段でしか」なくなっているとして、死亡宣告を言い渡した [トゥーレーヌ 1982: 8]。それから約10年後、その特殊な利害集団の防衛手段としての「社会主義」は表舞台から去ることとなったわけだが、同時にトゥーレーヌは「昨日まで社会主義運動が果たしてきた役割を明日から果たしていく新しい闘争と新しい希望」の到来を語っている。

M氏の経験にはまた、トゥーレーヌの描いた、変遷の道筋が投影されている。地域共同体が

近代国家に内包されながら解体され、個人が近代国家の断片として再構成されるプロセスにおいては、その国家の標榜するイデオロギーに対して階級的連帯に基づいて対抗する「プロジェ」としての社会主義は影響力を行使した。しかし、社会主義が「プロジェ」としての効力を失うにつれて、彼らはかつて自らが属した地域的文化的カテゴリーを、「異議申し立て」の「プロジェ」の担い手として再構成し、組織化を経て運動主体として可視化させた。そこには、自分自身の物語が投影された強い同一化の感覚により、「マイノリティ」としての自己の「発見」が伴う。

ここに見られるアレヴィーの組織化と可視化の過程は、社会の周縁に位置づけられた者が意味づけを弱めていく「階級闘争」という構図から離れ、自らの属性を闘争の武器として見出し新たな闘争の構図を見出していく過程と見て取ることができる。それは同時に、60年代以来のトルコ国内での都市への移住により、地域共同体から切り離された個人が、左翼運動を経由しつつ、社会運動と連動してアレヴィーというラベルのもとに再構成された「文化的」マイノリティとして、「新たな」アイデンティティを獲得していくプロセスという側面をもそなえている [Bozkurt 2000: 88-89]。

さらにその一部は、グローバル・ディアスポラの経験を経て地理的にヨーロッパへと移動した。それにより、移民を含む「異議申し立て」のアクターによるアイデンティティ・ポリティクス時代に入っていくポスト冷戦期のドイツならびにヨーロッパにおいて、「アレヴィー」という特異なマイノリティ集団が登場することになる。即ち、トルコにおいて「アレヴィー」と総称されていた宗派的な地域共同体群の出身者たちが、その一部が経験した左翼運動の方法を取り込みながら、可視的な運動主体として、ドイツならびにヨーロッパの「マイノリティ」化したのである¹⁶⁾。

*本調査は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)(1)平成15年度～平成18年度(課題番号16401034)研究課題「「アレヴィー・ベクタシ」集団のエスニシティと社会的・文化的秩序の変化と持続—トルコ・ヨーロッパにおけるトルコ系集団を中心として」(研究代表者:佐島隆)の助成を受けて行われた。

16) アレヴィーの組織は、ヨーロッパの複数の国家に形成され、相互に連携している。総連盟はその具体的な形態である。その集合的アイデンティティと運動は明らかにトランスナショナルな性格を持つが、この点については別途検討したい。

参 考 文 献

新井政美

2001 『トルコ近現代史』東京：みすず書房。

Ata, Kelime

2006 Türkiye Birlik Partisi, *Kırkbudak* 5: 44-50.

Bozkurt, Fuat

2000 *Çağdaşlaşma Sürecinde Alevilik*, İstanbul: Doğan Kitap.

Cashmore, E. Ellis

1988 *Dictionary of Race and Ethnic Relations (2nd ed.)*, London: Routledge.

Gül, Zeynel

1999 *Dernekten Partiye: Avrupa Alevi Örgütlenmesi*, Ankara: İtaliik.

石川真作

2007 「ドイツにおけるアレヴィー関連団体の展開」佐島隆（編著）『「アレヴィー・ベクタシ」集団のエスニシティと社会的・文化的秩序の変化と持続—トルコ・ヨーロッパにおけるトルコ系集団を中心として』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書・調査研究・論考編，pp. 96-115.

Kaleli, Lütfi

2000 *Alevi Kimliği ve Alevi Örgütlenmeleri*, İstanbul: Can Yayınları.

Kaplan, İsmail

2004 *Das Alevitentum: Eine Glaubens-und Lebensgemeinschaft in Deutschland*, Köln: Almanyaya Alevi Birlikleri Federasyon.

2005 Avrupa'da Alevi Örgütlenmesinin Geçmesi ve Geleceye Bakış, <http://www.alevi.com/aabf0+M5416c893e74.html> (2008年1月17日最終閲覧).

Melikoff, Irene

1998 Bektashi / *Kızılbaş: Historical Bipartition and Its Consequenses*, Oisson, Tord, Elisabeth Özdalga and Catharina Raudvere (eds.) *Alevi Identity*, Swedish Research Institute in Istanbul, pp. 1-7.

メルッチ・A

1997 『現在に生きる遊牧民——新しい公共空間の創出に向けて』（山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳）東京：岩波書店。

佐島隆（編著）

2003 『アレヴィー・ベクタシ集落における伝統的文化の変化と持続に関する調査研究——トルコおよびブルガリア（第1分冊）』平成12年度～14年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書。

2007 『「アレヴィー・ベクタシ」集団のエスニシティと社会的・文化的秩序の変化と持続—トルコ・ヨーロッパにおけるトルコ系集団を中心として』平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書・調査研究・論考編。

Sökefeld, Martin

2002 Alevi Dedes in the German Diaspora: The Transformation of a religious Institution, *Zeitschrift für Ethnologie* 127(2): 163-186.

2004 Religion or Culture?: Concepts of Identity in the Alevi Diaspora, Kokot Waltraud, Khachig Tölölyan and Carolin Alfonso (eds.) *Diaspora, Identity and Religion: New Directions in Theory and Research*, London: Routledge, pp. 133-155.

杉山光信

2000 『アラン・トゥーレーヌ——現代社会のゆくえと新しい社会運動』東京：東信堂。

トゥーレーヌ・A

1982 『ポスト社会主義』（平田清明・清水耕一訳）東京：新泉社。

1983 『声とまなざし』（梶田孝道訳）東京：新泉社。

Yalçinkaya, Ayhan

1996 *Alevilikte Toplumsal Kurumlar ve İktidar*, Ankara: Mülkiyeliler Birliği Vakfı Yayınları.

山内昌之

1987 『現代のイスラム——宗教と権力』東京：朝日新聞社。

Yılmaz, Nail

2005 *Kentin Alevileri*, İstanbul: Kitabevi.